

## 書 評

### 安川正彬 『人口の経済学』

春秋社，1965年7月，7+170ページ

本書発行後、直ちに、著者はわたくしに一本を下さった。わたくしも、直ちに、一気にさっと読んでしまった。その理由はいろいろあるが、要するに、近ごろ刊行される著書のうち最もひきつけられたものの1つであるということは確かである。

本書は3編から成り、第1編では、マルサスに始まって経済学における人口研究の系譜を、第2編では「人口転換」法則を論じ、第3編には人口分析の基礎理論を要説し、日本人口研究上重要な課題の1つ、国勢調査前の明治—大正期の人口動態の推計と分析についての著者の克明な業績が補論とせられている。

本書の主体は、第1編にある。「経済は社会の一部ではあるが、たんなる一部ではなく、経済は社会を構成する基盤である……。」「経済を通じて人口は社会と接触する……、人口と経済とはどのように結びついているのか、という基本課題を整理するのが……本書での仕事である。」(ページ4)。そして、「短期的考察においては、人口は互件として経済の外におかれるから、……枠組みを固める仕事を請け負っている……。」「長期の考察においては、人口と経済の相互の因果律を明らかにする任務を負わされている……。」(はしがき、ページ1)。

こうした立場から、マルサスに出発し、ビーコックの公式化を紹介し、収益通減法則を基礎として適度人口理論をたどり、キャナンからソービーの図式に及んでいる。そして、「古いケインズ」の出現から「新しいケインズ」への展開をたどっているが、「ビバリッジは人口過剰と失業が似て非なることを教えてくれたが、人口過剰を見せてはくれなかった。」(ページ43)。「人口過剰を見せてくれた最初の人」はカーソンダークであった(ページ45)として、『*Population, 1925*』を高く評価していることが注目に値する(ページ43—47、はしがき、ページ2—3)。「人口過剰と失業とは似て非なるものである。失業は有効需要の不足によってもたらされるものであるが、人口過剰は景気変動からくる沈滞を克服してなお残る潜在失業のなかに見いだされる……」(ページ5)これが著者の見解であり、研究系譜をたどる1つの主軸となっている。「新しいケインズ」以後、ハンセンの長期停滞論からクズネツを介してハロッドの成長論にいたっている。さらに、スルクセ、ペルショー、レイバンスティン、ダッタおよびサムエルソンの低開発国開発理論をたどり、著者は実践的価値は乏しいが「人口と経済の新しい流れが注ぎこまれている」(ページ83)ところに系譜上の意義を認めている。

第2編の「人口転換」法則のところでは、その西欧の模型を説明し、日本の特色を出生率の増加に認め(ページ108—113)、西欧的転換は経済の結果であったが、今日の低開発国では因果律が逆で、これを経済離陸の先行条件と認めている(ページ114—119)。

著者は、こうした系譜を開巻へき頭の近代建築の配管にも似た口絵に示している。その流動経路をわずか94ページにまとめたところは確かに著者の手際である。そして、著者は、「人口は社会の不幸の責任を一身に背負わされて」(ページ4)いる。「社会の不幸が深刻に感じられるとき、人口はいつでも経済学者の手もとにある」(ページ5)といい、また、「各時代を画した……経済学者たちが彼らの経済学を成功させたとき、……、つねにそれ(人口—筈)を正しく見ていた。」(はしがき、ページ2)しかし「逆は必ずしも真実ではない」(同所)という。同感である。

著者が、人口分析の基礎理論を第3編として設けたことには非常に賛成である。ただ、ページ120や129の説明にもかかわらず、第1編との接続について、また「人口秩序」の基本的認識について、いま少し懇切な説明が必要である。なおまた、人口研究系譜をたどった上に、「人口の経済学」の将来にいかなる展望が与えられるか、もっと知りたいと思うのは、おそらく、わたくしばかりではあるまい。

(館 稔)